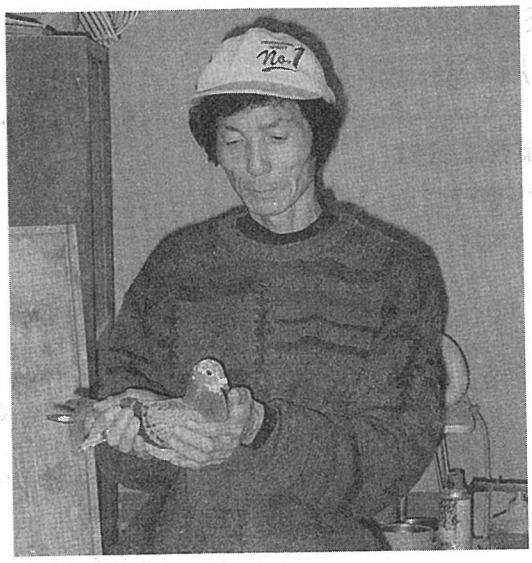
[……何もかも忘れて鳩を待つ……]



Toshio Shimada 嶋田敏男

●有限会社嶋田重機興業　代表取締役
出身／愛知県宝飯郡一宮町
血液型／O型
信条／親切丁寧
好きな言葉／鳩と仕事を「より早く」
嫌いなこと／お世辞

その道を進むと左手にレース鳩協会と描かれた明るい建物が見えてきます。その建物が実は鳩舎。右手の事務所前に車を停めると犬と猫、そして奥まった網の中からはウコッケイが迎えてくれました。果たして鳩レースって盛んなの？と思っていたらこれがなかなか奥が深い。花井さんも教えられるばかりです。嶋田社長に鳩レースを熱く語っていただきました。

●●●

400羽の鳩に囲まれて

――かなりたくさんの鳩を飼ってらっしゃるそうですね。

嶋田『んー、いま400羽ぐらいだね。掃除とエサやりがもう大変。お金もかかるねぇ（笑）。』

――その中から選りすぐってレースに出すわけですね。（壁のたくさんの賞状を見ながら）余市、というと…。

嶋田『北海道だわね。』

――北海道から鳩たちはここへ帰ってくるんですか！?

嶋田『帰ってこれんのもいるよ（笑）。1000キロなんてレースは、体力、能力、共に優れた鳩でないと、とても帰れるもんじゃない。レースも100キロから1000キロまであるけど、100キロだとスタート時に1万羽くらいいるし、帰ってくる確率も高い。でも1000キロだと、せいぜいその1割程度だね。その中で半分帰ってくるかなぁ。』

――激減しちゃうんですね。

嶋田『そう。可哀相な言い方だけど消耗品だね。せっかく育ててトレーニングしてもグンと減っちゃう。』

――レースはどういう仕組みになってるんですか。

嶋田『メンバーで、この地区で開催するレースに参加するわけだけど、この北海道の余市を例にとると、まずコンテナで鳩を輸送する。』

――嶋田さんは鳩と一緒に行かないんですか。

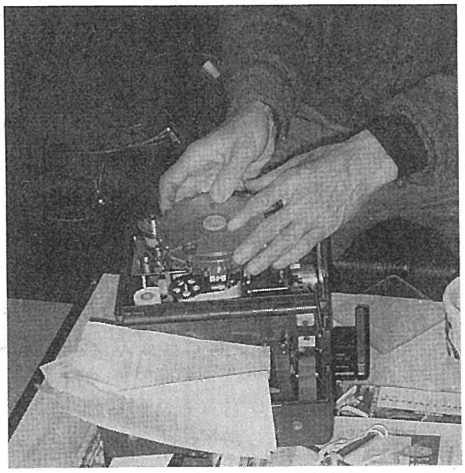
嶋田『僕は行かない。レースの係の人はもちろん行くけどね。レース地から登録してある鳩舎

までの距離は、地図上の距離で、これは専門家が測ります。そして、大会主催者の方で、レース地の余市から愛知・静岡地区までの天候をくまなく調べる。レース可能な天候であることが確認されて、そしてゴーということになる。時間と距離で「速さ」を競うわけだね。』

―― オーナーというのは、じーっと家で鳩が帰ってくるのを待ってるだけですか。

嶋田『「じーっ」とはしていないけどね（笑）。今か今かとワクワクして待ってはいます。それで鳩が帰ってくると、鳩の足についているレース番号の"わっか"をはずして、このピジョンタイマーにかけて打ち込むわけ。すると日にちと時間、秒まで記録される。これはレースの前日に8時なら8時ということで、鳩をレースに出す人達は一斉にタイマーを合わせて、そして封印をする。だからズルイことは一切できない。帰ってきた鳩の番号を次々打ち込んで、その封印のまま地区本部へ持っていく。そこで審査をうける。』

―― なるほどねぇ。すごいタイマーですねぇ。これがホントの鳩時計（笑）。でも、オーナーはレースにはついて行けないけど、審査には立ち合うわけでしょ。ドキドキしますね。



▶ピジョンタイマー

嶋田『レース鳩は生まれて一週間くらいで登録するわけ。そしてその鳩の登録番号というのをもらって足につける。それがコンピューターにかけて計算して、それで審査される。それでも小一時間かかるかなぁ。』

―― きちんとシステム化されてるんですねぇ。鳩のレースをちょっと簡単に考え過ぎてました。

嶋田『これもスポーツだからね。ルールやシステムというものはキチンとしてるし厳しいよ。ゴルフでも何でもそうだと思うけど、やってみると奥が深い。それでハマっちゃうんだね。』

［……何もかも忘れて鳩を待つ……］

[……何もかも忘れて鳩を待つ……]

——鳩に向かうきっかけは何だったんですか？

嶋田『もともとはバイクがすごく好きだったんだけどね。イタリアの「ドカティ」とか乗って走ってた。』

——ドカティ？（編集部注：イタリアンレッドのカラーが特徴の排気量900ccの外国製バイク。なかなか乗りこなすのが難しい名車のひとつ）へぇー！そういうバイクはどんなカッコして乗るんですか。

嶋田『（困ったように）まあ、ツナギとブーツだわねぇ…。』

——それでビュンビュンと？

嶋田『そうビュンビュンでもないけど。事故して左手に大ケガをしてからは、乗ろうと思ったら乗れんことはないけど、無理できなくなってね。』

——でもバイクの趣味というと、すごくアクティブなイメージですよね。それがいきなり鳩、というのは、静と動くらいの極端な感じがするんですが。

嶋田『いや僕はね、ゴルフやらないしマージャンもだめ。お酒も飲めんしね…。』

——エーッ、ホントですか！？

嶋田『顔で判断したらいかんよ（笑）。それで友達が鳩のことを教えてくれてね。やってみたら、さっき言ったように奥が深いというか、鳩の方もこちらがやればやっただけ応えてくれるというか、いろいろと面白味があるわけだね。』

——競争馬はサラブレッドということになりますが、レース鳩というのも、特別な種類のものなんですか。

嶋田『特別な種類を作るんだわね。もともとはやっぱり伝書バトということになるのかなぁ。戦時中とか新聞社とかが通信手段として使ってたんだわね。日本では江戸時代くらいにそういう記録があるらしいからね。鳩のレースなんかも大正時代からやってたって言うしね。』

——かなり以前からですねぇ。そうした鳩たちを交配して品種改良して、より帰巣本能の優れた体力のある鳩を創り上げていったんでしょうか。

嶋田『そういうことだね。まぁ、体力ということも大きな条件だけど、スピードで言うと輸入バトにはかなわないね。オリンピックの陸上競技ね、日本を代表する選手が出てってもアメリカとかカナダとか、あちらの選手には全く歯が立たないでしょ。あれと一緒でねぇ。もちろん、そうした輸入ものと在来の鳩をかけ合わせたりするし、あの手この手でやってみてもね、サラブレッドと同じで、100羽いたとして、せいぜいモノになるのは2～3羽かなあ。鳩にもブランドがあるし、ブランドものは高い。優秀な成績の鳩から子供を作ろうと思ってもなかなか出してくれないし、出してくれたとしてもこれまた高いしね。』

——こ自分で『この鳩とこの鳩』というかけ合わせもなさるわけですか。

嶋田『やりますけどね、鳩にも「相性」というのがあるんだね。これとこれなら、と思っても、鳩同志の相性が悪いとうまくいかない。できそこないもあるしね。』

――調教、というか、トレーニングも大変なんじゃないですか。

嶋田『そうだねぇ、車で連れていって飛ばす。いろんな方向からね。レースは春と秋の天候のいい時に限られるけど、オフもやっぱりこれをやっておかないといけないでしょ。でも一番大変なのは、何度も言うようだけどエサと掃除。それに産廃と一緒で、地域でいろいろあるしね。羽が飛ぶとかニオイだとか何だとかね。だからこういう田舎でないと、街ではこれだけの数の鳩はまずムリでしょ。』
(ここで鳩舎へ。急勾配の階段を登ると、おびただしい数の鳩が嶋田さんに反応する)。

嶋田『(その中の一羽を無造作につかんで) これがこないだレースで勝った鳩。』

――えーっ！？同じような顔の鳩ばっかりなのに、どうしてすぐにわかるんですか。

嶋田『そりゃわかるわ。これは兄弟が他にもいてね。』

――(頭に同じような白い斑点のあるのを指して) わかりました。これでしょ。

嶋田『全然違う。これ』(やはり白い斑点)

――うーん、どう違うのか… (笑)。でもそれが瞬時にわかるというのが、それだけ鳩に接してる、わかってるということですよねぇ。みんな嶋田さんの方を見てますもんねぇ。可愛いでしょ。

嶋田『エサもらえる、と思うんじゃないの (笑)。すごいホコリでしょ。掃除しないとね、雑菌とかウイルスとか繁殖して病気になる。それが大変だね。何がどうと言うことは具体的に言えないんだけど、やればやっただけ応えてくれるもんだね、動物っていうのは。だから全部やっぱり自分の手でやらないといけない。手を抜いたらダメだね。』

――そのたくさんの大変さがあるから、レースから鳩が帰って来た時の嬉しさはひとしおでしょう。

嶋田『そりゃそうだね。いろいろ計算して、うまくいけばこれくらいの時間に帰ってくるって言うことが僕らわかるでしょ。その計算より早く帰って来たら、もっと嬉しいわね。そうして、鳩のちょっとした仕草だとか何だとか見ただけで「あ、これは頭がいいな」とかわかるようになるんだね。ピジョンスポーツはお金もかかるし、お金かかる分、勝てば賞金も100万とか出るけど、それだけじゃないね。もちろん賞金ということだけに一生懸命になる人もいるし、それをどうこう言う気はないけど、自己満足の世界だからね。自分が手をかけた、自分の気にいった鳩が、どこの鳩より速く帰って来たら、こんな嬉しいことはない。』

――レース中にはどんな気持ちで鳩を待ってるんですか。

嶋田『今頃このへんかなぁ、とかね。産廃もいろいろ難しいことがあるでしょ。それを何もかも忘れて、という気分だね。趣味を通り越した感じもするんだけど、まあレース中は正直言って仕事したくないね。』

――しても手につかない (笑)。来春の成果をお祈りしてます。

INTERVIEWER
花井　美紀
(株) コミュニケーションデザイン代表
イベント司会・コーディネイター、
ビジネスマナーインストラクター、
信用金庫協会女子職員講座の専任講師。
TV、ラジオ等で現在活躍中。